

# 国立西洋美術館の復元に伴う増改築計画の提案

近現代建築における主用途を維持した保存活用

東京理科大学大学院  
吉川 和博

## 1. 序

### 1-1. 研究の背景

国立西洋美術館(以下西美)は20世紀を代表する建築家ル・コルビュジエ(1887-1965、以下LC)による晩年の代表作であり、東アジアの存在する唯一の作品である。竣工後約50年間に数度の改修工事が行われているが、その際LCのデザインを尊重した工事が行われてきた。また、建設の経緯や改修工事の資料も十分に保管されており、近現代建築の文化遺産として保存・活用されている。

昨今、フランス政府が中心となり、LCの世界各国に点在する作品を一括して世界遺産一覧表への記載物件として共同推薦する動向があり、西美もリストに加わっている。

### 1-2. 対象概要

西美は、1929年のムンダネウムの計画から着想を得、1939年にLCによって定義されてから幾度となく提案されてきた「無限発展美術館」のプロトタイプに基く美術館であり、世界に3例しか存在しない実現案の一つである。3つの実現案の中でトップライトの配置がコンセプト通り実現したのは西美のみであり、重要な特徴であると言える。

### 1-3. 計画の目的

本計画では、西美の建設・改修に関する資料を基に、改修によってLCのオリジナルデザイン(以下オリジナル)が失われてしまっている部分を特定し、復原・保存を行う。更に文化遺産として保存・活用してゆく為、美術館の機能拡張及び補完的役割を担う増築案を提案することを目的とする。

### 1-4. 提案までの流れ

LC財団、西美及び前川國男建築設計事務所に保管されている図面及び文書資料・雑誌資料・写真資料より、西美の建設経緯及び増改築箇所の調査を行なう。次に、この調査をもとに改修によってオリジナルが失われてしまっている部分を特定する。次に、現状をふまえた復原計画を提案する中で、増築計画を提案する。更にその後の展開として、JR上野駅公園口周辺再開発のマスタープランを提示することで、文化的遺産を取り巻く環境の再整備計画を提案する。

## 2. 増改築の経緯の分析

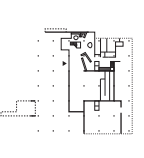
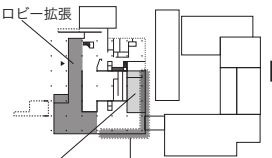
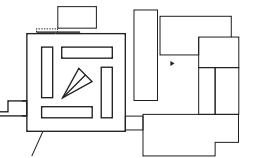
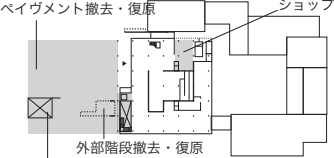
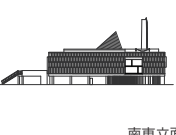
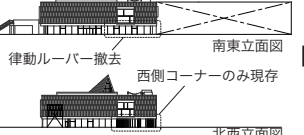
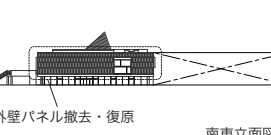
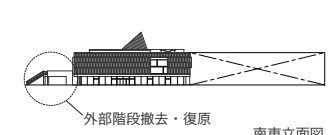



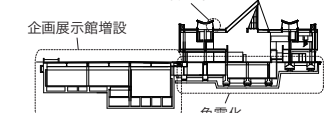
表1 竣工から現在に至るまでの増改築の年表

西暦	月	増改築内容
1954	3	国立フランス美術館(仮称)の建築設計者としてル・コルビュジエを、また日本側協力者として坂倉三三、前川國男、吉阪隆正を決定。
1956	7	ル・コルビュジエのもとから3枚の基本設計図及びスケッチブックが送られてくる。
1956	12	日本政府はル・コルビュジエの案に対し、予算超過に伴う縮小案及び設備・セキュリティに関する修正案を送付する。
1957	3	ル・コルビュジエのもとから9枚の実施設計図が送られてくる。
1959	3	国立西洋美術館建物落成。
6		開館式、一般公開
1961		本館の北側に「車庫」が増築される。
1964		本館の西側に「講堂」と北側に「事務棟」が建設される。
1967	8	新館建設用地として、隣接する寛永寺所有地1,488平方メートルを買収。
1968	6	新館建設用地として、前年に引き続き隣接する寛永寺所有地720平方メートルを買収。(計2,208平方メートル)
1969		東京文化会館と西洋美術館の間に面して売札所が建設された。
1975	5	新館建設調査委員会を設置し、基本構想策定。
7		新館基本計画を前川國男建築設計事務所に委託。
1979	5	新館竣工・本館の改修
1984		正面売札所の改築が行われた。規模は、以前のものと同じであるが、身体障害者の為のスロープが設置された。
1993	10	前庭地下展示場「21世紀ギャラリー」(仮称)の基本設計を策定
1994	6	本館の外壁パネルの撤去・新設の工事
1995	8	21世紀構想検討委員会(略称プロジェクト21)設置
1997	12	前庭の地下および本館の北西側に「企画展示館」増築「講堂」、「事務棟」、「売札所」撤去本館改修工事
1998	3	本館耐震改修(免震化)等工事終了。
4		本館・新館リニューアルオープン
2000	3	新館第三展示室(版画素描室)改修工事完了
2002	6	版画素描閲覧室、取蔵庫を新たに設置
2003	3	展示場内扉のバリアフリー(自動扉化)工事完了
2005	2	企画展示場内扉のバリアフリー(自動扉化)工事完了
2006	2	本館身障者便所改修工事完了

### 2-1. オリジナルの定義

現在の西美はLC設計の本館の他に新館、企画展示館を含む施設であり、本館のオリジナルを復原する際に竣工当時備わっていた機能が必ずしも必要ではない。本計画では「無限発展美術館」のコンセプト及びモデュロールによって当時設計された箇所に価値の所在を置き、それをオリジナルと定義する。その上で損失してしまっている箇所を復原すると同時に、現在必要である機能を配置してゆく。

表2 西美改変の変遷

	1959年竣工時	1979年 新館増築・本館改修	1996年 外壁パネル撤去・復元	1997-98年 免震化・企画展示館増築
平面の主な変更	 1F平面図	 ロビー拡張 喫茶室新設 律動ルーバー撤去 1F平面図	 外壁パネル撤去・復元 RF平面図	 ペイヴメント撤去・復元 ショップ 外部階段撤去・復元 前庭地下に企画展示館増設 1F平面図
立面の主な変更	 南東立面図	 律動ルーバー撤去 南東立面図 西側コーナーのみ現存 北西立面図	 外壁パネル撤去・復元 南東立面図	 外部階段撤去・復元 南東立面図
断面の主な変更	 自然光の入射する展示室	 ロビーの拡張によりピロティが一部内部化	 外壁パネルの撤去・復元及び外断熱施工 笠木の撤去・新設	 トップライトに遮光塗料塗布 企画展示館増設 免震化
その他		背部サービス部分間仕切り変更/木製間仕切り不燃化の為撤去・新設/3階バルコニーを倉庫に転用/館長室・秘書室・職員室間仕切り撤去/渡り廊下新設	屋上のプラントボックス撤去	B1Fスラブ、壁、階段、建具撤去・新設/展示室天井撤去・新設/19世紀ホールトップライトを排煙可能サッシュに取替え

## 2-2. 増改築の経緯の分析

西美は竣工から現在に至るまでに、要求される用途や収蔵品の増加に伴い数度の改修工事が行われている(表1)。その中で、主に現在の空間構成に関わる改修を行った「1979年新館増築・本館改修工事」、「1994年外壁パネル撤去・新設工事」、「1997-98年企画展示館増設・本館免震化工事」について分析を行い、竣工当時のオリジナルの損失部分の特定を行う。

### 2-2-1. 1979年新館増築・本館改修工事の分析

1979年には、新館の増築と共に本館の大幅な改修工事が行われている。ロビー拡張の為にピロティが縮小されたり、事務室や収蔵庫がレセプションや喫茶店に変更される等、1階のプランの変更が多く見られた。その際、モデュール法の寸法に基づく律動ルーバーは北西側のみ残り撤去された(表2)。

■考察: 展示室や収蔵庫、事務室等の機能的な拡張は新館に委ねられ、本館はサービス空間の拡張に重点が置かれた改修が成された。ピロティ空間はエントランスロビーを拡張する為の改修であったことがわかり、律動ルーバーの撤去は喫茶室から中庭への眺望を確保した結果であることがわかった。

### 2-2-2. 1994年外壁パネル撤去・新設工事の分析

1994年には外壁パネル撤去・新設工事が行われている。オリジナルの外壁パネルに埋め込まれた石の落下問題解決と同時に、外壁の外断熱施工が行われている。また屋上の笠木も撤去・新設された(表2)。

■考察: 外壁パネルの割り付けにモデュール法が適応されており、寸法、色共に忠実に復元されている。外壁内部には外断熱施工を施すことで、オリジナルを尊重しつつ、美術館としての機能向上が図られている。

### 2-2-3. 1997-98年企画展示館増設・本館免震化工事の分析

阪神・淡路大震災を受け、西美の耐震補強の改修工事が行われることになった。その際、近現代建築の文化的価値としての保存性をどの程度考慮するか検討する必要性から、1995年に国立西洋美術館本館等改修検討委員会が設置免震化工事が実施された。この工事に伴い、老朽化していた本館南側の外部階段が撤去・復元されるなどの改変がなされた。又、企画展示館が地下に増設された際、ピロティの南部分が内部化され地下への階段が設置された。前庭ペイヴメントは撤去・復元されたが、その後彫刻の周りを庭園風に改修する際、前庭西側の一部が失われてしまっている。トップライトには遮光塗料が塗られ、自然光によらない人工光のみの展示室となった(表2)。

■考察: 前庭の地下に企画展示館を増築することにより、美術館としての機能を拡張すると同時に景観の保存が試みられている。その際一度撤去されたペイヴメントも忠実に復元することにより、オリジナルを損なわない配慮がされている。しかしながら、

展示室の光環境をより安定させる為、西美の特徴であるトップライトからの自然光は、無効化されてしまったことがわかった。

## 3. 復原計画の提案

### 3-1. 復元に伴う問題点の整理

竣工から現在に至るまでの増改築において、「無限発展美術館」のコンセプトにおいて重要な要素が失われてしまっている箇所及び、モデュール法によって設計された部分において損失が見られる箇所は主に、ピロティ、前庭のペイヴメント、律動ルーバー、トップライトである。この四ヶ所の復元に伴う問題点を整理し表3にまとめた。

### 3-2. 復原・増築計画の提案

#### 3-2-1. 第1期: 前庭の復原

前庭西側の植栽を撤去し、ペイヴメントを復原する。

#### 3-2-2. 第2期: 律動ルーバーの復原

レストランを新館の中庭に面した位置に新設する。本館1階の北東部及び南東部の律動ルーバーを復原し、レストランのあった部分にミュージアムショップを新設する。元々ミュージアムショップであった部分は新たな展示ロビーとすることで、中庭方向へ視線の通るピロティ空間をつくる(表4)。

#### 3-2-3. 第3期: ピロティの復原

企画展示館へのアクセス経路を前庭南側に新設し、内部化されたピロティと撤去されてしまったピロティ内部のペイヴメントを復原する。本館1階北東側の竣工当時壁であった部分はガラス壁を設置し、売り札所及び開架図書のライブラリーを設置して一般公開する。

#### 3-2-3. 第四期: トップライトの復原

トップライトを復原し、本館を自然光の入る展示空間とする。その際、本館の絵画展示機能を受け継ぐ新たな展示空間が必要となる。

## 4. 増築計画の提案

トップライトの復元に伴い、美術館機能の拡張の必要があることから、西美の増築計画の提案を行なう。




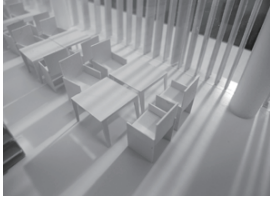
### 4-1. 計画敷地概要

上野公園は、明治6年の太政官布達によって、日本初の「公園」として指定された、日本で最も古い公園である。明治9年に博物館付属の公園となり、殖産興業のセンターとして位置付けられてから、日本の国家的な文化行事の開催の場となり、多様な文化施設が集積する地区となった。東京国立博物館から皇居へ向かう軸と、JR上野駅公園口と上野動物園を結ぶもう一つの軸、そして竹の台の空地が、上野公園の空間構成の主要素と言え、西美は公園の最も人々の出入りが多い場所に位置している。

### 4-2. 増改築計画の概要

上野公園の空間構成及び既存部との連携を考慮し、増築棟計画地を西美前庭の南東側に位置する緑地公園事務所前庭の地下部分

表4 改修により本館に設置した新たな機能

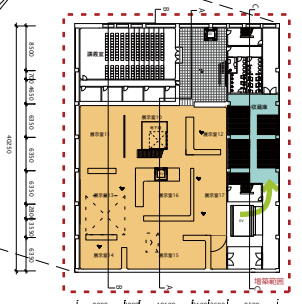
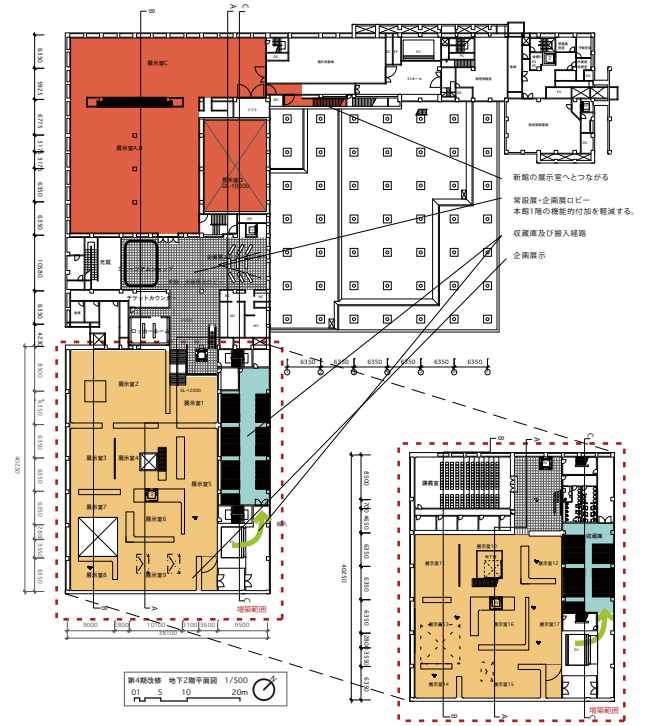
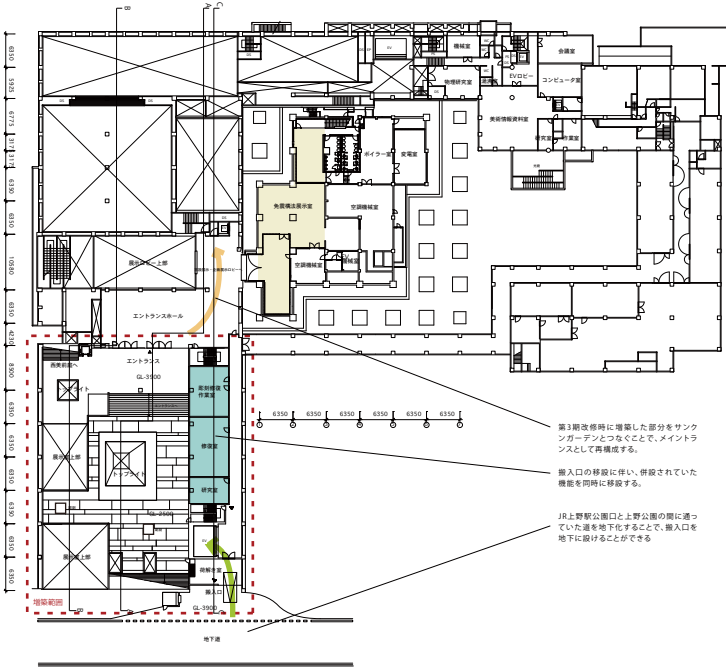
<p>中庭に面したレストラン(第二期改修)</p>  <p>中庭に透明な庇を設置し、テラス席を設けたレストラン。夜間独自営業も視野に入れ、一般に開放された中庭をつくる。</p>	<p>中庭に視線の抜けるエントランスロビー(第二期改修)</p>  <p>現在のミュージアムショップを移動することで、エントランスから律動ルーバー越しに中庭の緑が見える空間となる。</p>
<p>ミュージアムショップ(第二期改修)</p>  <p>現在レストランであった部分はミュージアムショップとし、中庭からもアクセスできるショップとする。</p>	<p>ミュージアムライブラリー(第三期改修)</p>  <p>現在地下の図書館に保管されている書籍の一部を一般公開する。律動ルーバーの影が気持ちのよいライブラリーとなる。</p>

とする。本館の常設展示の機能は、現企画展示館に移し、新館と合わせて常設展示館とする。増築部分を新企画展示館とし、常設展示館と地下で繋ぐことでロビーを共有する。地上部はサンクンガーデンとし、駅前の憩いの場を形成する。現在人々の流れを分断している車道を地下化することで公園と駅の間へのアクセスを改善すると同時に、美術館への搬入を地下から行なう。

結。

本計画において、国立西洋美術館の復原保存計画を段階的に行なうことにより、文化的遺産への負担を最小限に押さえ、運営しながら徐々にオリジナルの状態へ戻す提案を行なうことが出来た。

復元・改修第四期 平面図一部



- 常設展示室
- 企画展示室
- 特別展示室

黄色企画展示室として設けられている部分を除き、赤色に増築する部分を含み常設展示室とする。

